30　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。　〈東京大〉　二〇一六年度出題

　その日、変哲もない住宅街を歩いている途中で、私は青の異変を感じた。空気が冷たくなり、影をつくらない自然の調光がほどこされて、あたりが暗く沈んでゆく。大通りに出た途端、鉄砲水のような雨が降り出し、ほぼ同時に稲光をともなった爆裂音が落ちてきた。電流そのものではなく、来た、という感覚が身体の奥の極に流れ込んで、私は十数分の非日常を、まぎれもない日常として生きた。雨が上がり、空は白く膨らんでまた縮み、青はその縮れてできた端の余白からみ出たのちに、やがて一面、鮮やかな回復に向かった。

　青空の青に不穏のにおいが混じるこの夏の季節を、私は以前よりも楽しみに待つようになった。平らかな空がいかにかりそめの状態であるのか、不意打ちのように示してくれる午後の天候の崩れに、ある種の救いを求めていると言っていいのかもしれない。

　強烈な夏のしと対になって頭上に迫ってくる空が、とつぜん黒々とした雲に覆われ、暗幕を下ろしたみたいに世の中が一変するさまに触れると、そのあとさらになにかが起きるのではないかとの期待感がつのり、嵐の前ではなく後でなら穏やかになると信じていた心に、それがちょっとした破れ目をつくる。

　このささやかな破れ目につながる日々の感覚は、あらかじめ得られるものではない。自分のアンテナを通じて入って来た瞬間にそれが現実の出来事として生起する、つまり予感とほとんど時差のないひとつの体験であって、なにかが起こってから、あれはよい意味での虫の知らせだったとするのはどこか不自然なのだ。予報は、ときに、こちらの行動を縛り、息苦しくする。晴れわたった青空のもと街を歩いていて、すれちがいざま、これから降るらしいよといった会話を耳に挟んだりすると、ア何かひどく損をした気さえする。

　空の青が湿り気を帯び、薄墨を掃いたように黒い雲をひろげる。ひんやりした風があしもとに流れて舞いあがり、をなでる。来る、と感じた瞬間に最初の雨粒が落ち、稲光とともに雷鳴が響いたとき、日常の感覚の水位があがる。ずぶれになったらどうしよう、雨宿りをして約束に遅れたらどうしようなどとはなぜか思わない。それを一瞬の、ありがたい仕合わせと見なし、空の青みの再生に至る契機を、一種のとして受けとめるのだ。

　しばらくのあいだ青を失っていた空の回復を、私は待つ。崩れから回復までの流れを、予知や予報を介在させず、日々の延長のなかでとらえてみようとする。

　イ青は不思議な色である。海の青は、手を沈めて水をすくったとたん青でなくなる。あの色は幻だといってもいい。しかし海は極端に色を変えたとき、幻を重い現実に変える力を持つ。海の青をれるのは、それを愛するのと同程度に厳しいことなのだ。

　空の青も、じつは幻である。天上の青はいったん空気中の分子につかまったあと放出された青い光の散乱にすぎないから、他の色を捨てたのではなく、それらといっしょになれなかった孤独な色でもある。その色に、私たちは背伸びをしても手を届かせることができない。

　いつも遠い。当たり前のように遠い。それが空である。飛行機で空を飛んだら、それは近すぎてもう空の属性を失っている。遠く眺めて、はじめてその乱反射の幻が生きる。空の青こそが、いちばん平凡でいちばん穏やかな表情を見せながら、かれつづける青の粒の運動を静止したひろがりとして示すという意味において、日常に似ているのではないか。

　単調な日々を単調なまま過ごすには、ときに暴発的なエネルギーが必要になる。しかしその暴発は、あくまで自分の心のなかで静かに処分するものだから、表にあらわれでることはない。心の動きは外から見るかぎりどこまでもである。内壁が劣化し、全体の均衡を崩す危険性があれば、気づいた瞬間に危ない壁を平然とぎとる。ウそういう裏面のある日常とこの季節の乱脈な天候との相性は、案外いいのだ。

　青空の急激な変化を待ち望むのは、見えるはずのない内側の崩れの兆しを、天地を結ぶ磁界のなかで一挙に中和するためでもある。そのようにして中和された青は、もうこれまでの青ではない。ぽおっと青を見上げている自分もまた、さっきまでの自分ではない。この小さな変貌の断続的な繰り返しが体験の質を高め、破れ目を縫い直したあとでまた破るような、べつの出来事を呼び寄せるのだ。

　天気の崩れと内側の暴発を経たのちにあらわれた新しい空。雨に降られたあと、たちまち乾いた亜熱帯の大通りを渡るために、私は目の前の歩道橋の階段をのぼりはじめた。事件は、そこで起きた。いちばん上から、人の頭ほどの赤い生きものが、ふわりふわりと降りてきたのである。

　風船だった。糸が切れ、の力を失った赤い風船。一段一段弾むようにそれは近づき、すれちがったあともおなじリズムで降りて行く。私は足を止め、振り向いて赤の軌跡をで追った。貴重な青は、天を目指さない風船の赤に吸収され、空はこちらの視線といっしょに地上へと引き戻される。エ青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られたことに奇妙な喜びを感じつつ、私はとしていた。再び失われた青の行方を告げるように、遠く、雷鳴が響いていた。

（堀江敏幸「青空の中和のあとで」）

問１　「何かひどく損をした気さえする」（傍線部ア）とあるが、なぜそういう気がするのか、説明せよ。

問２　「青は不思議な色である」（傍線部イ）とあるが、青のどういうところが不思議なのか、説明せよ。

問３　「そういう裏面のある日常」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

◎問４　「青の明滅に日常の破れ目を待つという自負と願望があっさり消し去られた」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　Ａ夏の青空が突然一変する現象は、Ｂ平凡な日常のなかになにかが起きる期待感や新鮮な身体感覚が生まれる契機となるが、Ｃ予報を耳に挟むことでその機会を逸してしまうから。

Ａ・Ｂ・Ｃがそろっていること。

Ａ＝３〔夏の青空の異変という本文の話題提示を踏まえていれば可。〕

Ｂ＝３〔日常を破ることへの期待や新鮮さの感覚に触れていれば可。〕

Ｃ＝４〔予報が感覚に与えるマイナス面に言及できていれば可。〕

問２　最もＡ平凡で穏やかに見える青は、Ｂ遠く不安定な幻であるが、Ｃそれを重い現実に変える力を持ち、Ｄ深い孤独を内包しているところ。

Ｂ・Ｃ・Ｄのうちの一つがなければ全体０。

Ａ＝３〔Ｂ・Ｃ・Ｄの前提として青の外見上の印象に触れていれば可。〕

Ｂ＝３〔海・空に共通する青の特性である「幻」に触れていれば可。〕

Ｃ＝２〔海の青に即して本文の「幻を現実に変える力」に言及。〕

Ｄ＝２〔空の青に即して本文の「孤独」に言及。〕

問３　Ａ外面的には単調な日々を穏やかな心で過ごしているように見えるが、そのＢ内面で心が疲弊して均衡が大きく失われそうなときは、Ｃ暴発的なエネルギーを費やして新鮮な心を呼び起こしているということ。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔Ｂ・Ｃの前提として表向きの日常がまとめられていれば可。〕

Ｂ＝４〔「内壁が劣化」「全体の均衡を崩す」を言い換えて説明。〕

Ｃ＝３〔「壁を平然と剝ぎとる」を言い換えて説明。〕

問４　Ａ空の青が暴発的に失われ再び別な青として生成するように、Ｂ自己の内面を更新し高みを目指す想念が、Ｃ飛翔の力を失った風船の赤によって地上の現実に引き戻されたこと。

Ｂ・Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「青の明滅」を本文全体を踏まえてまとめられていれば可。〕

Ｂ＝４〔「自負と願望」の内容を本文全体を踏まえて説明。〕

Ｃ＝４〔「あっさり消し去られた」とはどういうことかを説明。〕